



図20 遺跡の位置  
5万分1地形図「新津」



図21 古津八幡山遺跡  
南地区頂上付近

古津八幡山遺跡 秋葉区古津・金津・蒲ヶ沢

新津丘陵の西側の尾根に立地する、弥生時代後期と古墳時代前期の遺跡である。新津美術館の裏側の尾根一帯が遺跡で、尾根頂上の標高は五三メートルである。平成十七（二〇〇五）年に約一一・五ヘクタールが国の史跡に指定された。

遺跡の発見は、昭和六十二（一九八七）年に磐越自動車道の建設に伴い、金津・古津・蒲ヶ沢の土砂採取予定地における遺跡範囲確認調査が行われ、古津八幡山遺跡を含む複数の遺跡が確認されたことによる。その後の開発協議で、遺跡の主要部分は現状保存されることとなった。これまでに、遺跡の範囲や性格を把握するための発掘調査を、新津市教育委員会が一四回、新潟市教育委員会が一回実施している。

弥生時代後期、丘陵上には防御的な高地性環濠集落が営まれた。南北四〇〇メートル、東西一五〇メートルの範囲から、環濠八条・堅穴住居跡四五棟・方形周溝墓二基・前方後方形周溝墓一基などが検出された。環濠は断続的ではあるが二重になっており、断面はV字形をしている（口絵）。最大幅三メートル、深さは二メートル程度であり、



図22 古津八幡山遺跡 イメージ図



図23 北陸系土器（左）東北系土器（右）  
右の高さ21センチメートル

環濠の外側に掘削した土砂を土塁状に盛っていたと推測されている。

竪穴住居の大部分は、環濠の内部や溝で区画された丘陵の頂部につくられている。平面形は隅丸方形で、規模は一辺四〜五メートルである。床面は硬くしまっており、四本の主柱穴や貯蔵穴、中央部に炉が検出されるものがほとんどである。また、雨水が流れ込まないように山側には排水溝がつくられていた。方形周溝墓は、埋葬施設から副葬品と考えられる鹿角装鉄剣やアメリカ式石鏃（セキゾク）が出土した。竪穴住居と同時期であるが、環濠の外側にあることから、居住域

とは区別された墓域が形成されていたと考えられる。前方後方形周溝墓は、環濠に囲まれた丘陵頂部から単独で検出された。出土遺物が少なく明確ではないが、集落廃絶直後の弥生時代終末期のものと考えられる。

出土遺物では、北陸系・東北系（天王山式系）・在地折衷系（八幡山式）の三系統の土器がある。これらは、竪穴住居跡や方形周溝墓、環濠から共に出土しており、同時に製作され使用されていたことを示している。日本

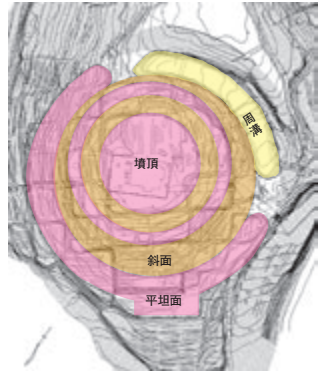


図24 古津八幡山古墳復元平面図  
『古津八幡山古墳Ⅰ』から作成

在のところ北陸系の高地性環濠集落としては最北に位置している。こうした防御的な集落は、西日本を中心とした政治的緊張の高まりによってつくられたとされている。

古墳時代になると丘陵上に集落は営まれなくなり、人々は舟戸遺跡（一八ページ）など平野部に移り住んだ。丘陵上には、かつて集落があった尾根の先端に古津八幡山古墳が築かれる。

この古墳は古墳時代前期のもので、直径約六〇メートルの円墳で北側に張り出しがある。墳頂部が広く、古墳の南側に周溝がよく残っている。同時期の住居跡などは検出されておらず、古墳一基が単独で存在する。尾根頂上の前方後方形周溝墓が弥生時代終末期と考えられることから、政治的緊張過程を経て出現した首長の墓と考えられる。古津八幡山古墳は県内最大規模であり、角田山麓にある菖蒲塚古墳（五二ページ）を上回る。

海や阿賀野川を介して北陸地方中西部や、東北会津地方とのつながりをもっていたことが分かる。このほか、石鏃六四点（うちアメリカ式石鏃九点）、敲石五八点、砥石三四点、礫石多数などが出土している。

弥生時代後期、北九州から関東・北陸地方にかけての各地で高地性環濠集落が営まれる。越後平野では現彦・角田山麓や新津丘陵に認められるが、本遺跡は現